第29回 **診療所事務長の仕事術**

診療所事務長はどんな仕事をしているのか。そんな疑問に、一般社団法人診療所事務長会のメンバーが答える。第29回目は医療法人桐葉会の安宅潤司氏だ。

コロナ禍で変化した企業のニーズに対応する

安宅潤司氏

医療法人桐葉会中之島フェスティバルタワー・さくらクリニック
ミドルマネージャー

あたか・じゅんじ●大学卒業後、現法人に入職し、勤務しながら看護学校を卒業。卒業後は看護師として、急性期病棟、訪問看護ステーションに在籍。2014年法人の新規事業として設立された中之島フェスティバルタワー・さくらクリニックに異動。リワークデイケア、外来業務に従事。現在は、法人内EAP会社『フォルテ』の代表取締役も兼務

当院は、大阪屈指のビジネス街・中之島に展開する大都市型心療内科診療所です。近隣に13万人のオフィスワーカーが就労しているため、休職者の復職支援プログラム（リワーク）のほか、従業員支援プログラム（Employee Assistance Program：EAP）を実施する専門企業「フォルテ」を併設し、企業のメンタルヘルスに力を入れてきました。

しかし、2019年冬以降の新型コロナウイルス感染症の拡大により経営環境は一変しました。まず、患者さんの「外出控え」により来院が減り、また、働く人のメンタル不調の訴えは目に見えて減少しました。「在宅勤務で人間関係の苦しみが減った」というのが主な理由です。20年4月には対前年同月比で売上25％減となり、その後も同様の状態が続きました。

一方で、コロナ禍に増えたのがワクチン接種に関する問い合わせです。「ワクチン接種をしているのか」「事業所全員に接種をしてほしい」との問い合わせのたびに、今の企業ニーズは「メンタルヘルス」よりも「ワクチン」だと、ひしひしと感じました。

しかし、当初はワクチン接種を行わず、発熱や体調不良のある患者さんに受診を控えていただくといった、感染防御の取り組みに力を入れていました。当院でワクチン接種を実施するのは、そうした感染対策に相反する面があるとも感じていました。

ただ、21年夏ごろ、大阪府の陽性者数が全国最多となり感染拡大が深刻化すると、「企業のニーズに応え都市部の陽性者を減らすのが医療機関の社会的意義ではないか」と思うようになり、院長とも相談し、当院でもワクチン接種開始を決定し、準備を急ぎました。

限られた院内では待機場所の確保は難しく、一番広い部屋を待機室としましたが、密回避のため接種スペースを調整する、通路はパーテーションで動線を区切るなどしました。また、従事するスタッフを限定し、実施日も毎週火曜日の一般患者がいない昼休憩時間中心とするなど、できるだけ安全に接種できるように努めました。

結果、週1回の約2カ月間でしたが、800人超に接種できました。主に、ビル内の職域接種未実施企業へポスティングしましたが、予約開始日には1日200人以上の予約が殺到。そこから口コミで広がり、近隣ビルからも問い合わせを多くいただきました。

準備期間が十分あったわけではなく、スタッフには大きな負担をかけてしまいましたが、一定の成果は残せたと考えています。なかでも一番の成果は、これまでかかわりのなかった企業の総務や人事担当者とのつながりができたことです。今後、職場のメンタルヘルスを強化する際に当院を思い出してもらえるよう、定期的にコンタクトを取っていきたいです。

また、経営視点では、心療内科の売上減をワクチン接種の利益や時間外加算、協力金で補うこともできました。22年4月からは3回目接種にも手上げする予定で、すでに企業からも前回を超える要望が集まっています。

一般社団法人診療所事務長会
https://cl-manager.com/
2016年1月発足の診療所事務長の会。診療所事務長や院長などが集まり月1回の勉強会を開催しているほか、日々の仕事についても互いに助け合っている